校歌に詠い込まれた環境イメージと環境資源との関係に関する調査研究
－和歌山県全域を事例として－

9612010　川端隆弘

第一章　本研究の背景と目的

1-1　研究の背景

1-1-1　環境イメージと環境問題との関係について

環境イメージとは、人間が景観を認識する際、人間がどのように景観を認識しているかであり、メディアイメージや体験することによるイメージで変容する新規イメージと変容する前の固有イメージがあり、両者の相互作用で新たな環境イメージが形成されるものである。

環境イメージを把握することは、地域が都市開発等で変容を余儀なくされた際に、環境イメージの許容範囲の開発に抑えることができ、乱開発を防ぐことができるということから、地域環境の保全に環境イメージが役立つといえる。

例えば、ゴミ分別という活動をとっても、そこにはゴミ－地域－地球という連関がイメージとして認識されることで、活動に積極的に及ぶものと思われる。すなわち、環境イメージというものは、環境計画においても必要な要素であると思われる。

1-1-2　環境イメージとしての歌について

歌は、歌うことによって身体に刻み込まれていくものである。すなわち、歌詞を分析することによって環境イメージを把握することができる。

1-2　本研究の対象

1-2-1　環境イメージとしての校歌

校歌とは、「その学校の教育理念や校風などを内容とし、学校で制定して、生徒たちに歌わせる歌」『大辞林』と定義されている。校歌は、一般的に教育理念や校風を掲げ、同時に郷土の歴史,風土を詠い上げるという共通の形式を持っている。

そのため、校歌に詠われている景観は、地域の特性を共有した景観を反映しているものであると考えることができる。

校歌に詠われている歌詞は、その地域の誇るべき環境要素であるといえるのではないか。したがって、その集合体としての歌詞を分析することによって、環境イメージを抽出することができる。

また、校歌は、その作成された時代の環境観を反映しているだろう、

さらに地域的にどこにでも同じような形態で散布しているものであり、地域の環境イメージデータとして比較的同じようなデータ源として活用できる。だいたいどこでも同じような校歌を持っている。

そこで、本研究では、小学校から高校まで、学区の範囲がことなるものであるが、全てを対象とする。

また、旧校歌および新校歌との変遷から、環境イメージの変遷も追えると考えた。

1-2-2　対象地域の概要

本研究では、和歌山県の全域を研究対象とする。全県的なレベルでの様相を見るために、小学校、中学校、高校まで全てを揃えてみることとする。また、旧校歌にも注目した。

1-3　本研究の目的

本研究の目的は、和歌山県の地域環境イメージを知り、把握することにあり、環境イメージを

出すことによって、開発等による地域環境の破壊からの保全に役立てること、および、旧校歌と現在の校歌を比較しての地域イメージを分析するという分析の手法の提言をすることである。

第二章　調査・分析方法

2-1　校歌収集方法

2-1-1　全学校リスト作成

データ和歌山`97 を参照して、全小,中,高校および諸学校のリストを作成。

データは 1997 年のものである。

2-1-2　校歌の収集について

[1]全学校に対して郵送にて(新・旧)校歌歌詞の返送を依頼。

[2]催促の葉書を学校長宛に送付

[3]再度催促の葉書を音楽担当教諭に送付

[4]電話あるいは同窓会誌,web などから回収

全歌詞をエクセルファイルに入力。

2-2　分析方法

2-2-1　環境イメージ要素の分類

分類方法として、大分類には、山，川，海のように景観を示す一般名詞で分類し、小分類には、紀ノ川，紀州富士をはじめとする固有名詞を分類した。また、中分類として、山，川に関しては、山系，水系で、海に関しては、紀伊水道と熊野灘の両者とどちらとも言い難い太平洋に分類した。

2-2-2　環境イメージ要素の頻度分析

校歌歌詞内の単語を同じ校歌歌詞中に複数回出現するものは一回につき１として分類表に沿って抜き出し、頻度表として整理する。

表現はやや異なっても同じものとして含める。

2-2-3　環境イメージ要素の関連分析

例えば、伊都高等学校の歌詞であれば、『葛城の峰の彼方に雲湧きて希望を語り紀ノ川の水いや清く澄みわたり理想を映す美わしき平和の園よ栄え行く我らが伊高』であれば、「葛城の峰」に、“彼方”,“雲”,“湧き”が関連していると考え、同様に「紀ノ川の水」には、“清く”,“澄み”,“映す”が関連しているという様に考えた。

固有名詞を形容している単語の検出方法としては、良い方法が見つからなかったため、手作業で検出した。

2-2-4　地域別分析

県全体，郡別，市町村別，流域別のそれぞれの分析をし、和歌山県全体イメージや、近隣地域のまとまった郡別イメージと、市町村のそれぞれのイメージ、流域ごとのイメージが出す。

また、流域別に分けることで、郡別とは違う近隣地域のまとまったイメージを出す。

2-2-5　時間変遷分析

旧校歌および現在の校歌の両者が存在している学校を抽出し、出てきている環境要素の違いを分析する。

2-3　分析の流れ

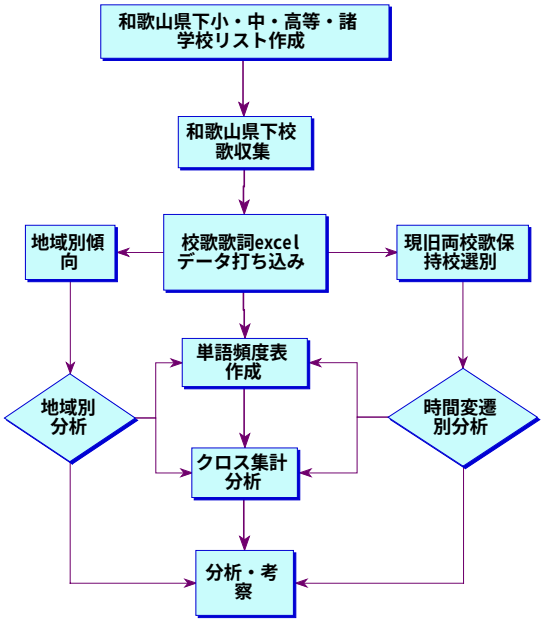

図１分析の流れのフロー

第三章　分析結果

3-1　和歌山県イメージ分析

3-1-1　環境イメージ要素の頻度分析

「山」に関する語が多く出現し、「平野」に関する語があまり出現しない。これは和歌山県が平野部の少ない山が多い県土であるというイメージを投影している。また、「川」に関する語と「海」に関する語が多く出現することから、和歌山県が水辺に近く、水に親しみやすい県土であるというイメージも見ることができる。

和歌山県下でも学校が多数存在する紀北地方を、貫流している紀ノ川流域近辺の、視覚的な認知がしやすい「紀ノ川水系」や、“高野山”を含んでいる「長峰山系」、「紀伊水道」、「和泉山系」が多く出現しているという特徴が有るといえる。

「紀ノ川」「日高川」「有田川」は、下流に和歌山県下では数少ない平野部を有している川で、平野部は人口が集まりやすく学校が多くなることから出現数が多くなっている。「葛城山」は紀ノ川流域から視認できる山であること、「黒潮」は和歌山県の温暖なイメージと暖流とのイメージが合致しているということ、恵みを与えるイメージから身近であり、出現数が多いと考えることができる。

3-1-2　環境要素のイメージ分析

「川」の全体イメージは、“清さ”を表す単語と“流れ”を表す単語で過半数を占めており、“清さ”,“流れ”に「川」は一般的にこうあるべきだというイメージを出しており、“清さ”,“流れ”の中に生徒にそうあれという教訓をも含んでいると考えることができる。

「山」の全体イメージは、“光”を表す単語が多く、“位置”を表す単語も 2 割近く占めており、「山」についての語に関して、“光”と“位置”を表す単語が多く出てくるが、「山」の“姿”をさほど出していないことから、「山」の場合は、「川」と異なりあまり教訓としていないと考えることができる。

「海」の全体イメージは、“波”を表す単語が突出していることから、「海」の全体イメージが、波に洗われている海岸や、波がうち寄せている海岸をイメージしていることを示しており、「海」に関しては、全く教訓とするわけでもなく、ただ出ているだけであるといえる。

3-2　郡別イメージ分析

3-2-1　環境イメージ要素頻度分析

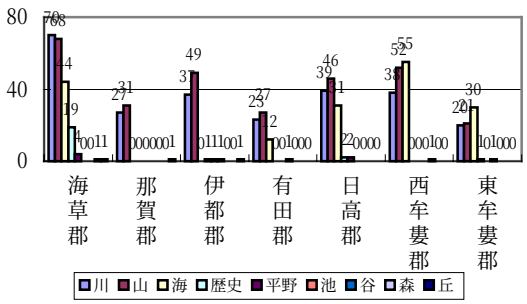

図 2

紀北の３郡（海草，那賀，伊都各郡）においては、「川」および「山」の比率が高い、これは、県全体イメージで出現数が多かったために必然であるといえる。なお、この地方では、「川」は、ほとんどが「紀ノ川水系」である。また、那賀，伊都両郡は、海に面していないためでもあることから、紀北の３郡は「紀ノ川水系」とその分水嶺となる山系が地域イメージであると考えうる。

これに対して紀南の２郡（西牟婁，東牟婁両郡）では、「川」,「山」よりも「海」の方の比率が高くなっており、紀南の２郡は「海」が地域イメージであると考えることができる。

一方間に挟まれている紀中の２郡（有田，日高両郡）では、「川」,「山」,「海」の比率が同じように比率が高く、紀中の２郡は、紀北，紀南の両方のイメージの中間の地域イメージを有していると考えることができる。

3-2-2　環境要素のイメージ分析

紀北の３郡と日高郡で最も多く出てきているイメージが“清さ”であり、有田郡では、“映える”, 西牟婁郡では、“仰ぐ”, 東牟婁郡では、“単出現”が最も多く出ており、紀北の３郡と日高郡は「川」のイメージが強いといえ、有田郡と東牟婁郡は、「山」,「川」,「海」にまんべんなくイメージが分散しているといえる。西牟婁郡は「山」のイメージが出ていることがいえる。

3-3　市町村別イメージ分析

3-3-1　環境イメージ要素頻度分析

市町村の環境要素で最も多く出てきたのが和歌山市の「紀ノ川」次いで、和歌山市の「和歌山城」, 田辺市「高尾山」, 和歌山市「黒潮」, 橋本市「紀ノ川」の順に多くなっている。和歌山市は学校が多いため、要素が多く出現する。「紀ノ川」,「和歌山城」,「黒潮」は和歌山市地域イメージであると考えられる。また「高尾山」は田辺市の、「紀ノ川」は橋本市のそれぞれ地域イメージであるといえる。

3-3-2　環境要素のイメージ分析

市町村で最も多く出ているイメージは、和歌山市の“清い”で、次いで、田辺市の“仰ぐ”, かつらぎ町の“清い”の順になっている。和歌山市、かつらぎ町の“清い”イメージは、「紀ノ川」に由来し、田辺市の“仰ぐ”は、「高尾山」に由来していることがいえる。

3-4　流域別イメージ分析

3-4-1　環境イメージ要素頻度分析

流域で多いのが「紀ノ川水系」,「日高川水系」, 「有田川水系」の順で、「山」は分水嶺となるため流域から除外した事から、県全体の中分類を「川」だけ抜き出したものと変わらないイメージが出てきている。

3-4-2　環境要素のイメージ分析

この分析も、県全体の中分類イメージと同様のものになっている。

3-5　イメージ変遷分析

3-5-1　環境イメージ要素頻度分析

現在の校歌になって増加している要素は、「学校」(0→18)があり、逆に減少している要素は、「道」(22→10) などになっている。

「学舎」が増減していないが、「学校」が増加していることから、旧校歌では、校舎のイメージであったが、現校歌では学校全体をイメージしていると考えることができる。また、「道」が減少しているのは、校歌が教訓として「道」を教えなくなってきていると考えることができる。

第四章　結論

和歌山県においては、「川」が“清く”, “澄み”わたっているというイメージを出しており、また流量の多い川が多く、流れが“尽きない”というイメージを出しているといえる。また「山」が多く「平野」が少ないため「山」にふれやすい県土であるというイメージを有しているともいえる。

また、紀北、紀中、紀南でそれぞれ「川」、「山」、「海」の認識の比率が異なり、各地域の特色が出ている県土であるといえる。

さらに、「歴史」として古くから信仰されている“高野山金剛峯寺”や“熊野大社”が環境イメージとして認識されていないことから、あまり「歴史」を校歌に詠まない県土であるといえる

そして、自然環境をよく詠んでいる県土であることから、この結果で地域イメージを把握することに寄与し、地域環境を守ることに、役立つのではないだろうか